

新学習指導要領を踏まえた高校国語の授業

—新科目「現代の国語」における授業実践報告—

1. はじめに

2022年度より始まった新学習指導要領の理念に基づき、どのような授業を展開していけばよいか。高校国語の新科目創設にあたっては、「論理的な文章」・「実用的な文章」と「文学的な文章」と大きく区分された近代以降の文章について、授業内でどう取り扱うべきかという議論も呼んだ。また、高校国語では「教材への依存度が高い(文部科学省)」ことが課題として指摘されている。こういった状況を鑑みて、今年度は「現代の国語(1年生 164名対象、2単位設定のうち1単位を授業担当)」において、教材のみに依存するのではなく、様々な情報を組み合わせること、論理的・実用的な国語力を身につけることを目的として授業を行った。

2. 授業実践・考察

本校は、二期制で授業を実施している。前期は、教科書に掲載されている「論理的な文章」を主な題材として、対比や具体を用いた論理展開を読み解いたり、文章要約の練習をしたりした。後期は、前期同様に「論理的な文章」を元にした読み取る・書いて表現する授業に加え、以下のような授業を実施した。

「聞く力」を育成する講演会授業

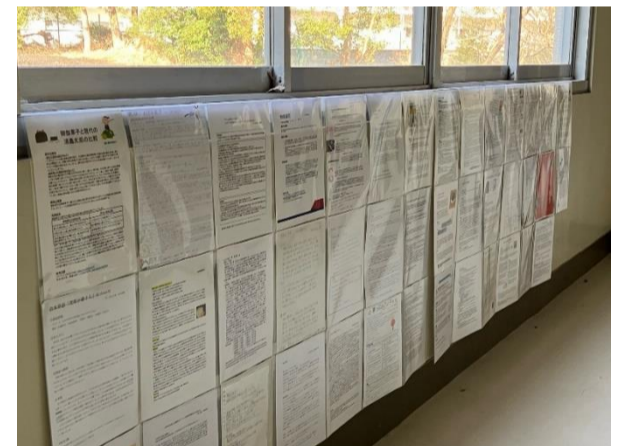
古典文学を中心に研究している方々を講師に招き、「文学を探究するとは」というテーマで、講演会を実施した。約40分間の講話を聴いて、その要旨を文章化させる授業を2回行った。題材そのものは古典文学だが、「現代の国語」で求められている「聞く力」の育成を狙いとした。前期のうちに、文章を読んで要約文にまとめる練習はさせていたが、提出された要旨文を確認すると、耳で聴いた情報をその場で理解して文章にまとめる作業は生徒にとって難易度が高かったようであった。講演会を実施する前に、短いスピーチ動画などを活用して「聞く」練習を行い、講演会の機会をより効果的に活かすべきであったというのが反省である。

論文を活用して、文学作品を論理的に読み解く

夏目漱石『夢十夜』「第一夜」を題材とした。本単元第一時は、生徒に自由な読みをさせ、クラス内で意見交流をさせた。その際は、どのクラスでも「百合」を「女」の再生とみなし、「女」と「自分」の再会劇とする一般的な読み方が主流であった。第二時では、「百合」を「女」の象徴とする読みは共通しているが、そこからどう作品を解釈するかが一般的な読み方とは異なる論文を二本提示した。「文学的な文章」であっても、主観的な読みをしたり、登場人物の感情や心情に思いを馳せたりするだけでなく、テキスト論や作家論の立場にたって論理的に読み解くことを狙いとした。生徒からは、「最初は漠然とした読みだったが、論文を活用することで根拠を持って読み取ることができた」といった感想が得られた。また、CiNii等を活用してインターネット上でも研究論文が手軽に読めることを体験させ、情報活用能力を高めることも狙いとした。時間の都合で、本単元では教員が授業内で取り扱う論文を指定したが、生徒それぞれが論文検索して自分の考えを深めるのに役立つ論文を選定する時間が取れば、論文の「実用的な文章」としての位置付けがより高まるだろう。

物語探究レポートの作成および鑑賞

生徒たちが幼少期に親しんだ絵本・童話・昔話などを題材に、各自が探究活動を行い、レポート(A4用紙1枚)にまとめる課題を冬休みに課した。ジェンダー学などの学術的文献をもとに考察したものや、幼少期に読み聞かせしてくれた保護者や年下のきょうだい・親戚にインタビューしたもの、比較文学の観点で考察したものなど、多種多様なものが提出された。そして、成果物をクラス内で相互評価し、学年全体で鑑賞した。題材そのものは絵本などの子供向けのものだが、それを学術的な観点から分析したり、自分とは異なる世代と語り合いながら考察したりすることで、広い視野を持って文章に向き合う力を育成することを狙いとした。相互評価・鑑賞を終えた生徒からは、「物語と自分以外からも情報を集めることの大切さがわかった」や「惹きつけられる人は同じ題材について述べた論文を多く用いて様々な視点から述べていた」など、様々な情報を組み合わせて多角的に物事を理解しようとする姿勢の大切さに気付いた意見がたくさん挙がってきた。また、「この年齢になってから改めて絵本などを読むと、小さいころには意識しなかったことを考えたり気付いたりでき」というように自分自身の成長・変容を感じ取った生徒も多かった。さらには、「子供の頃からの思い出や記憶が時間が経ってから学びを深める手掛かりとなるのは、どんな体験も学びにおいて無駄なことはなかったと証明することになる。探求する楽しみをこの学習で感じる事ができた」のように、国語科の範疇を超えた、学ぶ喜びを得られた生徒もいた。



ところで、本校生徒のうち、約半数が学校の図書室を利用したことがなく、そのうち約半数が「読書の習慣がない」(2023年1月に実施した校内アンケートより)。家の本棚を眺める・図書館に足を運ぶなどして、本を手にとってもらうことも狙いの一つであった。生徒からは、久しぶりに物語を楽しめたことを素直に喜ぶ声も挙がり、今後の読書活動に繋がっていくことを望む。一方で、生徒のレポート内に記された参考文献のうち約半数がオンライン上の資料で、URLのみの記載で誰がいつ書いたものかさえ不明なもの、信ぴょう性が高いとは言えないものが多かった。紙の書籍にこだわる必要はないが、情報の信頼度や妥当性について考えさせることの必要性を感じた。

新聞記事を活用して、思考力を伸ばす

日経電子版を利用して、生徒それぞれの興味関心に合った記事を収集させ、そこからキーワードを掘り起こして、そのニュース・出来事に対して自分はどういう「問い」をもち、どのように思考を深めることができるかを考えさせるワークを行った。教材は、株式会社ARROWSおよび日本経済新聞社から提供を受けた。「新聞はほとんど読まない人間でしたが、通学の際に電車の中で度々新聞を読んでいました。新しい習慣ができてよかったです」のように、実社会を知るための情報ツールとして、新聞という選択肢が増えた生徒が複数いた。また、「いつも漠然とよんでいた新聞なのに、読み方や『視点のおき方』について考え、意識するだけで自分が興味を示しているものが分かったり、それについて更に深く知ることができるようになってよかった」のように、文章からどのように情報を読み取るか、そこからどう考えを深めていくか、に気付きを得た生徒もいた。様々な形態の文章や情報源に触れることで、それをどのように読み解いていけば、自分にとって有用な情報になるか、を考えさせるきっかけになったであろう。自身がどういった分野に興味関心があるかに気づけたという声も複数あり、高校卒業後の進路を考える・探究授業のテーマを決めるといった場面でも、新聞記事は有用であろう。

3. まとめ

本年度の「現代の国語」授業では、教科書掲載文以外に論文や新聞記事を読んだり、普段接する機会の少ない学外の人から話を聴いたりする機会をもうけた。様々な文章や情報を組み合わせて実社会で必要とされる論理的・実用的な国語力を育成し、他者との関わりの中で自分の思いや考えを広げたり深めたりする力を育成していけるよう、今後も研鑽を積んでいきたい。

4. 引用・参考文献

文部科学省『【国語編】高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説』第2節 国語科改訂の趣旨及び要点 2018年7月
『特集 変わる高校国語×変わる授業づくり』「教育科学国語教育」867号(2022年3月号) 4-51頁、明治図書出版株式会社